

- 櫻井清彦他 1997 『大井町史』資料編 原始古代中世近世(1) 大井町
- 杉山博久他 1990 『秦野市史』通史1 総説 原始 古代 中世 秦野市
- 鈴木保彦 1980 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』
9 神奈川考古同人会
- 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 西川修一他 1997 『宮畑遺跡(No. 34)遺跡 矢頭(No. 35)遺跡 大久保(No. 36)
遺跡』かながわ考古学財団調査報告25 かながわ考古学
財団



写真2 整理作業風景

註

- (1) 用語の統一を計るため、本稿では、原文中の住居址を住居跡、炉址を炉跡、配石址を配石遺構に統一して記述を行った。
- (2) No. 2 遺跡は山田字今宮、No. 7 遺跡は山田字算玉山に相当する。本稿では、No. 2 および No. 7 遺跡をあわせて金子台遺跡と呼称する。
- (3) 赤星の報告では、3号住居跡という名称はない。しかし、1号配石遺構群 B グループ直下に大部分が工事中削平されたものの、石囲炉および住居跡に伴う可能性があるピットが検出されており、加えて遺物の注記には3号住居跡の記述があるため、本稿では住居跡と捉えた。
- (4) 石器の名称については、現在使用されている名称に一部原文を改変した。硬玉製玉、石臼については原文のまま記載した。
- (5) 石野の報告では、C 地点出土土器と加藤採集品をあわせて加曽利 E、堀之内、加曽利 B 式土器の出土が報告されており、確実に C 地点から出土した土器型式についての報告がされていない（石野 1939）。その後赤星らにより C 地点の踏査が行われ、堀之内、加曽利 B 式土器が確認されている（赤星 1974）。

引用・参考文献

- 秋田かな子 1996a 「南関東西部の加曽利 B 式土器—構造の理解に向けて—」
『後期中葉の諸様相』第 9 回縄文セミナー 縄文セミナーの会
- 1996b 「南関東西部の様相」『後期中葉の諸様相—記録集—』第 9 回縄文セミナー 縄文セミナーの会
- 赤星直忠 1967 「神奈川県足柄上郡金子台遺跡」『日本考古学年報』15 日本考古学協会
- 1974 『神奈川県金子台遺跡』横須賀考古学会研究調査報告 3 横須賀考古学会
- 1979 『神奈川県史』資料編 20 考古資料 神奈川県
- 石野 瑛 1939 「相模国山田村芭蕉住居址と金田村金子台遺跡」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』第 7 集 神奈川県
- 神奈川県 1970 『神奈川県埋蔵文化財遺跡地図』
- 神沢勇一 1966 『金子台遺跡の縄紋時代墓地』第一生命保険相互会社
- 1968 「神奈川県足柄上郡金子台遺跡」『日本考古学年報』16 日本考古学協会
- 県史編纂室 1970 『神奈川県史資料所在目録（考古資料遺跡別表）—小田原市・足柄上郡・足柄下郡—』

高地、東海地方の土器が目立っている。

5 まとめ

本稿では、遺跡の概要報告、地点ごとの出土土器型式の集成、および既に報告された出土土器についての再検討を試みた。その結果、金子台遺跡では地点ごとに土器の出土傾向が異なり時期差があること、D地点の配石遺構に伴う小形土器の中に堀之内2式が含まれていることを指摘した。

従来D地点の配石遺構の存続時期は、副葬品と推定される小形土器の時期から判断して、加曽利B1式期と捉えられてきた。しかし、小形土器の再検討、またD地点出土土器から判断すると、D地点の配石遺構の存続時期は、堀之内2式から加曽利B1式期と推定できる。金子台遺跡全体でも、土器型式の主体は堀之内2式から加曽利B1式であり、他時期の土器と比べて量が多く破片の接合率も良いことが明らかになった。また、整理作業を進める中で、今回集成した地点別の土器型式と異なる土器型式のものが多く確認されているため、今後詳細な検討を行う予定である。

昭和女子大学において遺物の整理作業が始まって、今年は5年目になった。5年という月日は長いですが、平均して週1回の数時間の作業時間では、膨大な資料を前に作業も遅々として進んでいない。また、本学では遺物の整理作業は初めての試みであり、一つ一つの作業が試行錯誤であった。土器型式にしても勉強会を重ねていく中で、最近になって型式の判別が可能になったものが多い。

現在は、昨年からの課題であった遺物の大部分を占めていた出土地点不明の一括土器の洗浄がすべて終了し、土器の接合作業を始めている。今後も土器を中心とした整理作業を進め、随時成果を報告する予定である。各方面からのご教示、ご批判をいただければ幸いである。

整理作業参加者（50音順）

安孫子千穂、石井寛子、伊丹優、伊東(勝間田)美奈子、井上英美子、井上美奈子、今井明子、上野真澄、浦山亜紀子、大島美和子、久保友嘉里、熊川望、小泉奈保子、後藤麻衣子、桜田晶子、佐々木由香、佐藤愛子、鈴木珠美、鈴木由貴子、田川聡子、竹田純子、多田みのり、都所真理、中村有香、畠山麻美、東嶋啓子、藤井恵、堀内靖子、真下孝子、舘まりこ、柳原由紀、山口和泉

また、整理作業および本稿作成にあたり次の方々にご教示いただいた。記して感謝致します（敬称略）。なお、図版の作成にあたり舘まりこの協力を得た。

新井達哉、大塚秀子、高橋敦子、高橋満、田中祐二、守屋豊人

ここでは、堀之内式と加曾利 B 式を区別するにあたって文様構成および口縁部形態に注目する（秋田 1996a・b）。

図 2 の A は、球形の胴部に直立した口縁部をもつ壺形土器である。全面淡褐色。文様は、口縁部および括れ部の 2 本の沈線間に刻みを施す。胴部上半には 3 本の沈線をめぐらし、上方の沈線は 4 ヶ所で上方に開口し、横帯文の下部には充填縄文による 4 単位の変形三角文を有する。また口縁内側に 2 本の沈線を施す。上方は細く、下方は太い。加曾利 B1 式に比定される。

B は、外反する口縁部形態で、4 単位波状口縁の小形の鉢形土器である。口唇部上端に上向きの「8」字状の突起を貼り付ける。外面無文であるが、内面に文様をもつ。口唇部から 6 本の沈線をめぐらし、2・3 本目、5・6 本目の沈線間に刻みを施す。内文の施文は口縁部の上方に位置する。口縁部は内外面共に平坦面を形成しており、直線的に開く形態を呈する。堀之内 2 式に比定される。

C は、頸部を欠損する小形の壺形土器であろう。上方に 3 本の沈線をめぐらし、縦方向の短沈線による区切文を施す。横帯文の下部には充填縄文による三角文を施す。これらの文様の特徵から加曾利 B1 式に比定した。

D は、外反する口縁部をもつ小形の深鉢形土器である。胎土中に雲母および砂を含む。口縁に 3 ヶ所の扁平な「8」字状の突起がある。外面は上方に 3 本、下方に 1 本の区画沈線を伴い、その間を文様帯として 2 条の沈線による弧線を連結した文様を施す。内面には 2 条の沈線をめぐらす。文様の特徵および口縁部形態からも堀之内 2 式に比定される。

E は、外反する口縁の小形の浅鉢形土器である。口縁部に 3 単位の球状突起を持ち、突起の根元に沈線を施す。突起の両脇には小突起が付随する。外面は無文であるが、内面は 3 条の沈線がめぐり、突起の下部には 2 条の沈線による弧線状の文様を施す。口縁部形態、突起の形状、内文の施文方法から堀之内 2 式に比定される。

F は、外反する小形の鉢形土器である。器厚が薄く、口縁部内面に太く浅い沈線をめぐらす。口縁部は内外面共に平坦面を形成しており、直線的に開く形態を呈する。堀之内 2 式に比定される。

以上のことから、小形土器は堀之内 2 式もしくは加曾利 B1 式に比定される。よって、配石遺構の存続時期は縄文時代後期前葉から中葉に渡ると推定できる。

また、整理作業を進めていく中で、以前から報告されていた型式の土器に加え、破片数は多くないものの、前期諸磯 b 式、中期曾利式、後期称名寺式、加曾利 B2 式、高井東式、晩期安行 3d 式、前浦式、佐野式、清水天王山式を確認している。このように前期後葉から晩期中葉にかけての土器の出土が判明したことにより、断絶する時期はあったにせよ、長期間に渡る人々の活動の痕跡を確認することができた。また、在地系の土器に伴い、異系統の土器も多く出土していることから、他地域との活発な交流を推定することができる。異系統の土器型式は、各時期とも中部

B2区	包含地	加曾利 E、加曾利 B、晩期安行	1962～64
C	敷石住居跡 1 ⁽⁵⁾		1938
	包含地	堀之内、加曾利 B	1962～64
D	包含地、炉跡 1、住居跡 1 ^(検出地点不明)	加曾利 E、堀之内、加曾利 B1、安行 3a、弥生条痕文 (これらの詳細な出土地点不明)	1962～64
D1区	包含地	加曾利 E、堀之内、加曾利 B、安行 3a、弥生条痕文	以下同じ
	配石遺構 1	加曾利 B1	
D2区	包含地	報告なし	
D3区	包含地、炉跡 1	加曾利 E、加曾利 B	
D4区	包含地	報告なし	
D5区	包含地	加曾利 E、加曾利 B	
D6区	包含地	加曾利 E、加曾利 B	
D7区	包含地	加曾利 E、堀之内	
E	包含地	勝坂、加曾利 E、堀之内	1962～64
		加曾利 B、(晩期?) (これらの詳細な出土地点不明)	
	1号配石遺構群	勝坂、加曾利 E、堀之内、加曾利 B	1973
	2号配石遺構群	勝坂、加曾利 E、堀之内、加曾利 B	以下同じ
	3号配石遺構群	勝坂、加曾利 E、堀之内、加曾利 B	
	1号住居跡	加曾利 E3、堀之内	
	2号住居跡	報告なし	
	3号住居跡	加曾利 E3、堀之内、加曾利 B	
F	遺物散在地	加曾利 E、加曾利 B、(後晩期)	1962・63

4 出土土器の再検討 (図2)

出土土器は大部分が地点不明土器であるが、その土器を水洗し、おおよその分類を行ったところ、時期の主体は報告されている通り、縄文時代中期後半、後期前葉～中葉、晩期中葉であることが判明した。特に後期前葉堀之内 2 式から中葉加曾利 B1 式土器にかけて破片数が多く、接合率も良い。また精製土器の占める割合が高いという特徴がある。従来、遺跡の主体となる D 地区の配石遺構に伴う土器は加曾利 B1 式期に限定されると報告されてきた (赤星 1974)。こうした遺物の中にも堀之内式がみられることから、組石下の 5 基の土坑内から出土した副葬品と報告されている小形土器 (図 2、A～F) の再検討を行う。

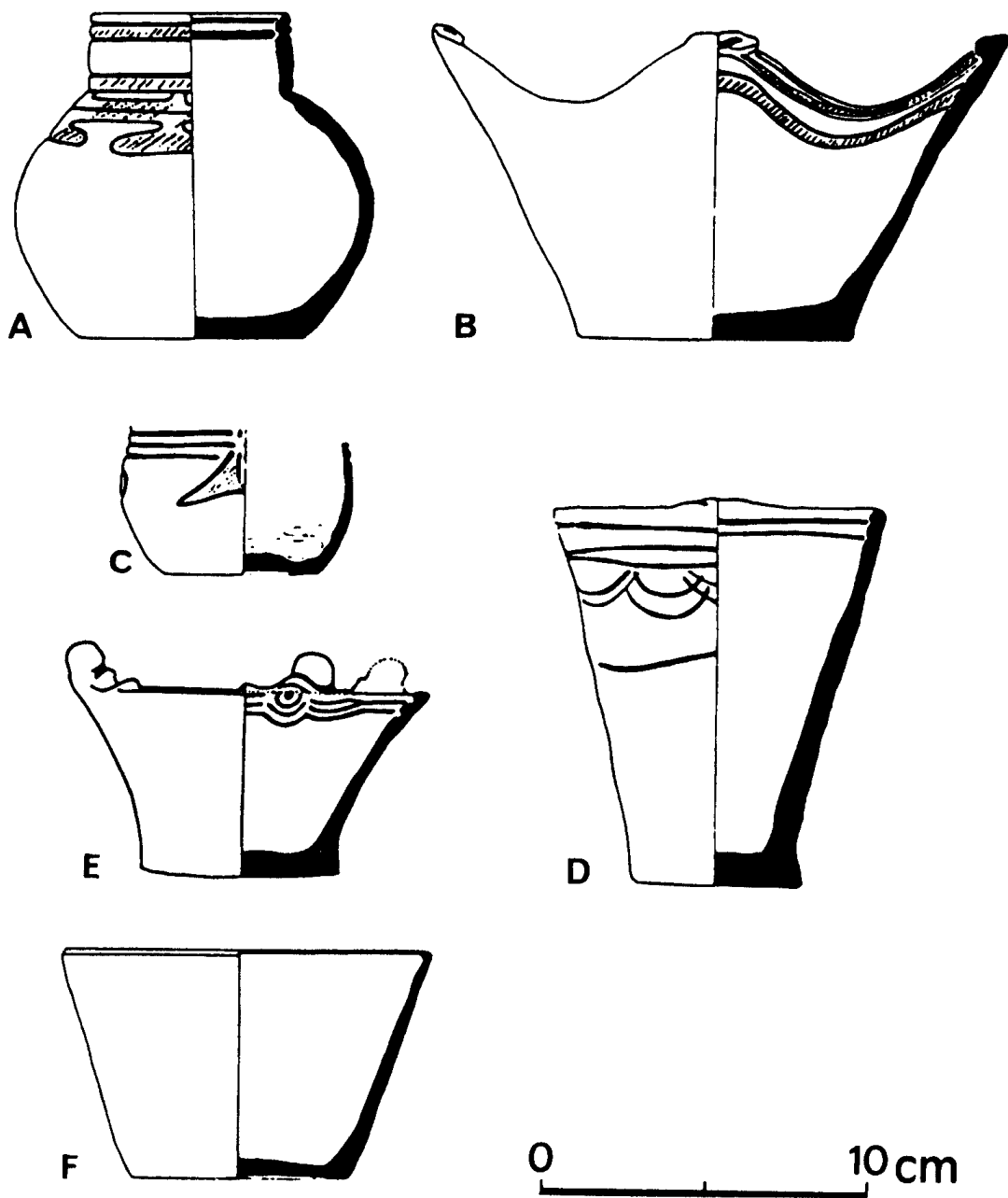


图2 D地点配石遺構出土小形土器 (赤星 1974 を改変)

遺構4群、住居跡5軒、炉跡、ピットが検出されている。特に配石墓と推定できる土坑を伴った配石遺構が検出されたことは、金子台遺跡調査以前には「敷石様遺跡」などと称され、敷石遺構の下部構造は調査されることが少なかった事から、配石遺構研究の上で重要である。

昭和女子大学日本文化史学科には、上述した1962～64、1973年の調査の出土遺物が寄託されたが、遺物の大部分は出土地点が不明な土器である。一部の遺物には出土地点や出土遺構などが注記されているが、報文中の記載内容と一致しない場合も多い。そこで、本稿ではこれまで報告されている地点ごとの出土土器型式を集成し、今後の整理作業の基礎資料としたい。

3 出土遺物

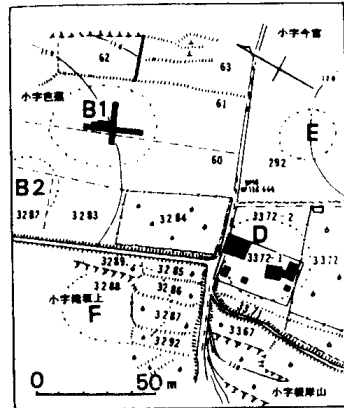
従来報告された出土遺物は、文献ごとに遺物の種類や土器型式の追加もしくは削除がみられるが、その根拠が示されていないため、ここでは報告されているすべての遺物をあげることにする。遺物は、縄文時代後期加曾利 B1 式の土器を主体として、土器（早期条痕文、中期勝坂式、加曾利 E 式、後期堀之内式、加曾利 B 式、晩期安行式、大洞式、弥生時代条痕文）、土偶、土玉、硬玉製玉、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、局部磨製石斧、石皿、石臼、凹石、砥石、石錘、敲石、磨石、石棒、石剣、石核、剥片、骨片（獣骨、魚骨）の出土が報告されている（赤星 1967・1974、石野 1939、⁽⁴⁾ 県史編纂室 1970）。

ここでは、これまでの報告を元に地点ごとの出土遺構、土器型式の集成を行う。なお、型式に下線があるものは、その地点で主体となっている時期の土器を示している。時期が判明している遺構については、時期もあわせて示した。

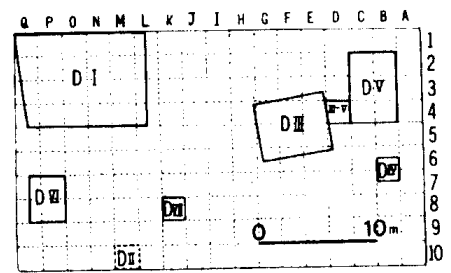
地点	性格(遺構)	土器型式	調査年
A	遺物散在地	早期条痕文（茅山上層式？）、 加曾利 E2	1962～64
B	包含地	加曾利 E、安行 2～3c、 大洞 B～C（これらの詳細な出土地点不明）	1962～64
B1 区(D区北東部)	包含地	加曾利 E、加曾利 B、晩期安行	1962～64
B I トレンチ	包含地	加曾利 E、晩期安行	以下同じ
B II トレンチ	包含地	加曾利 E、晩期安行	
	ピット 1	晩期安行（ほぼ完形土器3個体の出土が報告されている）	
B III トレンチ	包含地	晩期安行	
B IV トレンチ	包含地	報告なし	
B V トレンチ	包含地、炉跡 1	晩期安行	
B VI トレンチ	包含地	報告なし	



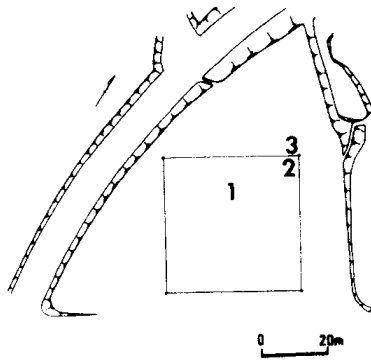
金子台遺跡位置図
(A～Fは地点名を示す)



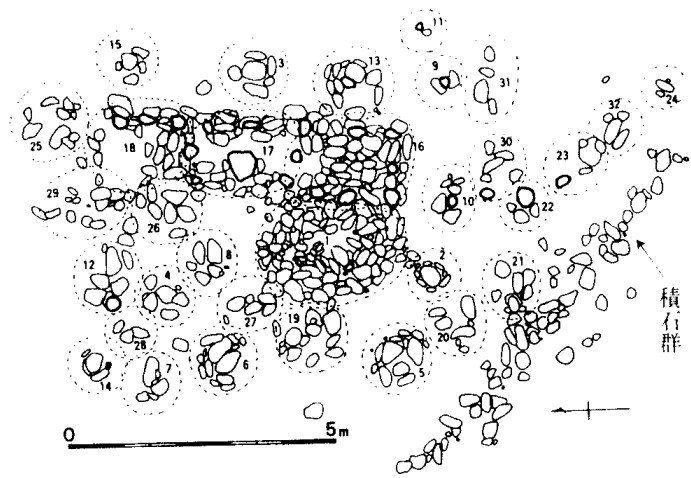
B・D・E・F地点位置図



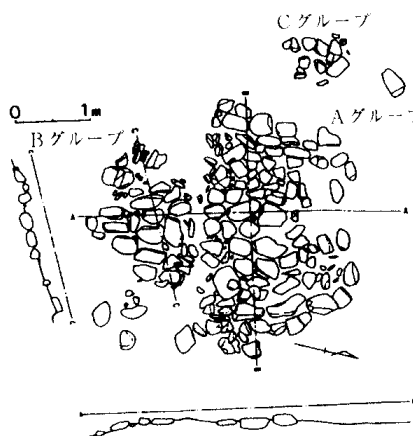
D地点トレンチ位置図



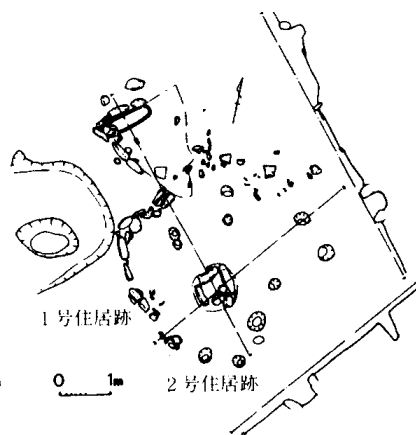
E地点調査位置図
(1～3は配石遺構群を示す)



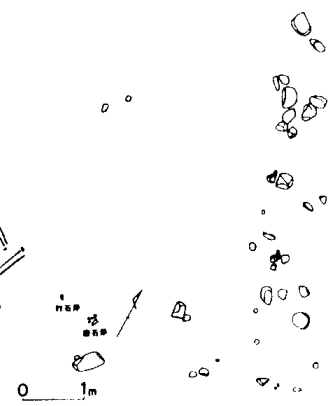
D地点配石遺構全体図
(1～31は組石の番号を示す)



E地点1号配石遺構群



E地点1号配石遺構群下住居跡



E地点2号配石遺構群

図1 金子台遺跡位置図および遺構図 (赤星 1974 を改変)

年頃に金子台一帯が縄文時代の遺跡であることを発見し、遺物の採集を行っている。その後、加藤の採集品を実見した石野瑛は、山田村芭蕉（のちに金子台遺跡C地点）を1938年に発掘調査し、敷石住居跡1軒を検出した。また、石野は加藤の採集品と発掘調査で出土した土器、石器、骨などの遺物について報告をしている（石野1939）。

1962～64年には、第一生命保険相互会社の本社建設工事に先立ち、赤星直忠、神沢勇一らにより、A・B（B1・B2区）・D・E・F地点の遺物散布地が確認され、B・D地点で発掘調査が行われた。その結果、縄文時代中期後半、後期前半、晩期前半の3期の包含層、遺構としてはB地点において晩期のピット、D地点において後期加曾利B1式期の配石遺構、住居跡1軒などが検出された（赤星1974）。

配石遺構の規模は約10m²で、その中に意図的と思われるまとまりをもって形成された組石が31基検出された。組石は11基について調査が行われ、組石下部に土坑の存在が確認されている。一部の土坑には、副葬品と思われる小形土器や石器、骨などが伴出した。これらのことから、組石は配石墓としての機能が推定されている。神沢は組石を形状と構造により、Ⅰ～Ⅲ型の3型式に分類し、赤星は分類をさらに進めてⅢ型をⅢA型（ⅢA1・ⅢA2型）、ⅢB型に分類している（神沢1966、赤星1974）。配石遺構から南へ約10mの位置には同時期の住居跡、同じく南へ約20mには炉跡が検出された。これらの規模および詳細な位置は報告されていない。配石遺構と住居跡との間には、帯状の石群によって墓域と居住域を区別していると考えられる積石群1基が検出されている。

1963年にはD地点付近において、縄文時代後期のほぼ完形の双口土器が表面採集された（赤星1974）。

1973年には第一生命相互保険会社の体育館建設工事中に配石遺構が発見され、金子台遺跡E地点の発掘調査が赤星らによって行われた。E地点はD地点配石遺構から東南東約60mに位置する。調査の結果、中期末葉から後期前半に所属する住居跡3軒⁽³⁾、後期前葉堀之内式を主体とする1号から3号の配石遺構群が検出された（赤星1974）。1号配石遺構群は7基の組石（うち3基は土坑を伴う）によって構成され、形状によってA～Cグループに分類されている。また1号配石遺構群下には残存状況が良くないものの、3軒の住居跡（うち1軒は柄鏡形敷石住居跡）が検出された。2号配石遺構群には3基の組石（内1基は土坑を伴う）、3号配石遺構群には1基の組石がそれぞれ検出されている。E地点の配石遺構群下に検出された土坑のほとんどは黒色土中に掘り込まれており浅く、遺物が出土しなかったため、詳細は不明である。

また詳細が明らかでないが、金子台遺跡付近の調査で、ローム層直上から縄文時代早期山形押型文、無文土器の出土が報告されている（赤星1974）。

金子台遺跡では、これまでの調査で、縄文時代中期から晩期の遺物包含層、配石

神奈川県足柄上郡大井町金子台遺跡の遺物整理報告（1） —縄文時代後期配石遺構出土土器の再検討—

佐々木 由香

1 はじめに

神奈川県足柄上郡大井町大字金子および山田にかかる通称金子台と呼ばれる台地⁽¹⁾に所在する金子台遺跡は、縄文時代後期中葉（加曾利 B1 式期）の配石遺構を主体とする遺跡として知られている。すでに民間（第一生命保険相互会社）の建設事業などのため、発掘調査が数回行われており、配石遺構や住居跡などの遺構の他に、多量の遺物が出土している。1974年に刊行された遺跡の概要報告は、配石遺構を中心とした報告であり、出土遺物の詳細な検討はなされていない。そこで、昭和女子大学日本文化史学科では、1995年3月に大井町市史編纂の一環として、第一生命保険相互会社に保管されていた金子台遺跡出土遺物を一括して寄託を受け、翌年より昭和女子大学研究館内において土器を中心とした遺物整理作業を行っている。整理作業は櫻井清彦先生、小泉玲子先生を顧問として、考古学研究会に所属する学部生および大学院生により進められている。出土遺物は、土器の量だけでも破片で数千点におよんでいるため、整理作業は現在も進行中である。

本稿では、今までの整理作業で得られた知見を踏まえ、遺跡の概要報告およびすでに報告されている土器の再検討を行う。遺物整理作業で行っている遺物の詳細な検討は、次稿に譲ることとする。

2 遺跡の概要と調査略歴（図1）

神奈川県遺跡台帳で大井町 No. 2、No. 7 遺跡に位置する金子台遺跡⁽²⁾は、河岸段丘のように南北にのびる比較的平坦な台地上内に形成されている（写真1）。遺跡の東には国府津—松田断層の活動によって形成された谷状の地形が湾入しており、断層壁からは水が湧く。遺跡の標高は約 120m で、近接する中屋敷遺跡より約 30m 高い。相模湾西部に面する西湘海岸からの距離は、直線で約 8km である。

金子台遺跡は古くから遺物の散布地として知られていたが、加藤誠夫は 1932～33

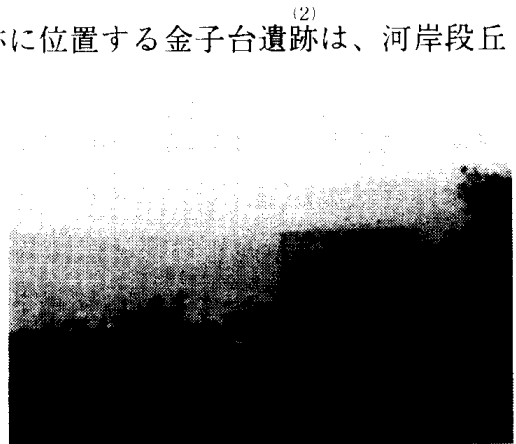


写真1 遺跡遠景

（右手に見えるのが第一生命
相互保険会社本社ビル）